

日輪兵舎の創案者に関する考察（一）

松山 薫

東北公益文科大学総合研究論集第31号 抜刷

2016年12月20日発行

日輪兵舎の創案者に関する考察（一）

松山 薫

I. はじめに

日輪兵舎とは、1938年に開所した満蒙開拓青少年義勇軍訓練所¹（茨城県東茨城郡下中妻村内原〔現・水戸市内原町〕、所長は加藤完治、以下「内原訓練所」と記す）に全国から集まる訓練生を収容する宿舎兼教室として使用された、円形の平面と円錐形の屋根という独特の形状をもつ木造建造物である。終戦までのごく限られた時期に、限られた用途のために存在したこの建物は、内原訓練所の象徴とみなされ、当時の国策の浸透とともに、各地で模倣された。しかし、戦後はそのように全国へ伝播したことはおろか、こうした建物が存在したこと自体がほとんど忘れ去られつつあった。

そうしたなか、筆者は、地方に残存していた日輪兵舎の調査を行ったことを端緒として、この建物の果たした役割の全体像を検討するために、内原訓練所以外のものも含めた日輪兵舎に関する事実の発掘とその分析を、2000年代初頭よりすすめてきた²。その過程で、日輪兵舎に関する記述を収集するために、満蒙開拓青少年義勇軍についての同時代資料を渉猟しているうち、ある奇妙な傾向に気づいた。それは、この日輪兵舎という特異な建物を誰が造り出したかという、非常に根本的な事項にかかわる記述に、一部の分野で食い違いがみられることである。

¹ 満蒙開拓青少年義勇軍（1937～1945年）とは、数え年16～19歳の青少年を開拓移民として当時の満州に集団で送出する制度である。内原の訓練所は全国から集められた青少年の内地訓練（2～3ヶ月）を担う中核的施設であった。

² その一部は、①松山 薫「満蒙開拓の痕跡をたずねて－山形県にあった「日輪兵舎」〔序章〕－」、東北公益文科大学総合研究論集、8、2004、75-90頁。②松山 薫「日輪舎（シリーズ 歴史を語る建物たち⑤）」、Future SIGHT（荘銀総合研究所）、36、2007、8-9頁。③松山 薫「日本各地の「日輪兵舎」－忘れられた満蒙開拓青少年義勇軍の象徴－」、季刊地理学、67、2015、191-195頁。などで公表した。

日輪兵舎の創案者は「古賀弘人」という建築家である。このことは、後述するように、内原訓練所の発刊物をはじめ、満蒙開拓青少年義勇軍制度の宣伝に寄与した一般書や雑誌記事等から明らかである。しかしながら、それを「渡辺亀一郎」とする文献が、ある分野に限ってみられる。その分野とは建築学であり、この記述は戦後の文献にまで及んでいる。

どうしてこうした齟齬が生じたのか。本論文では、主に2000年以前に公開された論文や随筆などの文献資料をもとに考察する。そして、満蒙開拓青少年義勇軍のみならず満州開拓の象徴とさえいわれた日輪兵舎に関する基本的な知見を確認する。

II 創案者としての古賀弘人に関する記述

古賀弘人は1893年に熊本市で生まれた。内原訓練所が1940年に発行した『義勇軍旬報集録』の编者による紹介記事³には、熊本の中業を中退して16歳の時に満州に渡り、満鉄に入ったとある。その後孫文の革命軍での電信大尉、第6師団の漢口派遣隊を経て、帰国後大阪高工で建築設計を学び、満州国軍政部と関東軍の囑託をつとめたのち、満蒙開拓青少年義勇軍にかかわるようになったという。一方の渡辺亀一郎は、内原訓練所史跡保存会事務局編『満州開拓と青少年義勇軍－創設と訓練－』⁴（1998年）によると、山形県東置賜郡和田村（現・高畠町）の生まれで、兵役（近衛歩兵）除隊後に加藤完治が所長を務める山形県自治講習所に入所し、修了後は郷里で、のちに千葉県で農業に励んだ。その後ふたたび加藤完治が校長を務める茨城県の日本国民高等学校の職員となり、古賀のもとで建築の技術を学び、内原訓練所の建築主任となった。古賀と渡辺の経歴については、1990年代に中崎一通の論考⁵および『満州開拓と青少年義勇軍－創設と訓練－』において、内原訓練所関係の一次資料や遺族への取材に基づいた詳しい報告がなされている。

³ 古賀弘人「日輪兵舎の沿革」、旬報編集室編『義勇軍旬報集録』、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所、1940、57-58頁。

⁴ 内原訓練所史跡保存会事務局編『満州開拓と青少年義勇軍－創設と訓練－』、内原訓練所史跡保存会、1998、508頁。

⁵ 中崎一通「日輪兵舎雑記」、『郷土研究紀要』（内原町郷土研究会）、8、1991、8-15頁。

さて、日輪兵舎を主題に書かれた最初期の文献と目されるものに、古賀弘人自身の「なぜ日輪兵舎と称するか」⁶という文章がある。これは、1938年2月末の内原訓練所の入所開始時期にほぼ重なるように発行された、満州移住協会発行の広報誌である『拓け満蒙』第3号（1938年3月）に掲載されており、執筆者の古賀の名前には「創案者」の肩書きが付されている。ここで古賀は、日輪兵舎は、その形のみならず、平時は教育の場として、有事は城塞として機能する二面性が、慈愛と威力の二相を備える日輪と相通ずるがゆえに、「敢て日輪兵舎と命名する」と宣言している。

また、同じく古賀みずからの文章になるが、既出の『義勇軍旬報集録』に所収の「日輪兵舎の沿革」⁷という記事では著者名の上に「考案者」の文字がある。古賀は、着想のルーツは1932年であること、内原以前にも奉天軍司令部の円型兵舎、友部国民学校の日輪兵舎、三江省饒河の日輪兵舎、某所の関東軍営舎などの試作的建築を重ねたことを明らかにしている。また、渡辺の参画は1937年の饒河からとある。このことから、古賀が日輪兵舎の創案者とみるのが妥当である。『義勇軍旬報』は内原訓練所の公式刊行物であり、上記の内容は基本情報として他の一般書⁸にも引用されている。

内原訓練所には、開所直後から各方面からの取材や視察が相次いだ。そうした視察記の中でも時期の早いものに、たとえば日本青年館の『青年』第23巻第5号（1938年5月発行）に掲載された「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所 内原道場を訪ふ！」⁹という記事がある。同記事でも、日輪兵舎に関して「古賀弘人氏の考案で、渡辺亀一郎（建築班主任）氏、小森助松氏等が改良を加へ、更に時々刻々建築班員の創意が加へられて現在のものにまでなつた」（旧漢字は現在のものにあらためた。以下同様）と記述されている。

朝日新聞社が1939年に発行した『満蒙開拓青少年義勇軍』¹⁰には、同社が主催した座談会「義勇軍はかく語る」が収録されている。その場において、内原訓練所総務部長の江坂弥太郎が「先達古賀さんに訊きますと、夢を見てその夢

⁶ 古賀弘人「なぜ日輪兵舎と称するか」、拓け満蒙、2（3）、1938、30頁。

⁷ 前掲注3。

⁸ たとえば、黒田 正著『大陸日本教育の父 加藤先生と内原訓練所』、明治図書、1940、309頁。

⁹ 『満蒙開拓青少年義勇軍訓練所 内原道場を訪ふ!』、青年、23（5）、前付。

¹⁰ 朝日新聞社『満蒙開拓青少年義勇軍』、1939、248頁。

から日の丸宿舎を思いついたといふお話でありました」と、古賀の日輪兵舎発案のきっかけを披露している。江坂はまた、満州の「饒河に宿舎が必要となりまして、その宿舎に日の丸兵舎を作ることになり、古賀先生の指揮の下に、渡辺君がお手伝ひをして現地で建て」たことから、その経験により渡辺が内原訓練所の日輪兵舎建築を引き受けることとなったという。

すなわち、渡辺は、古賀が日本国民高等学校校長の加藤完治（のちに内原訓練所所長）の命を受けて内原訓練所建設に先立つ1937年に饒河に日輪兵舎を建てたときに同行し、初めて日輪兵舎の建築にかかわったとみられる。それまで建築の知識はなかったが、熱心に研究を重ね、内原訓練所の建築班主任となった渡辺は、突貫工事で多数の日輪兵舎を建設することに献身したが、1938年3月の完成直前に急逝している¹¹。

Ⅲ 創案者／設計者を渡辺亀一郎とする文献

このように、内原訓練所の日輪兵舎群の誕生に大きく寄与した渡辺であるが、日輪兵舎の創案者とするのは、前章でみたように事実と異なると思われる。しかしながら、渡辺を日輪兵舎の創案者もしくは主たる設計者と位置づける文献が、建築関係のものにしばしばみられる。

日輪兵舎の出現は、その特異な形態ゆえに当然建築関係者の注意を引き、開所後間もなく著名な建築学者らが内原訓練所を訪れている。岸田日出刀は最も早い時期に内原訓練所を訪れた建築関係者の一人であると思われる。岸田は1938年6月に内原を見学し、同年8月発行の『国際建築』誌に、さっそく次のような見聞記を載せている。

「当日私達を案内し説明してくださつたのは、訓練所建築班の森本宗一氏と江坂弥太郎氏であつた。建築専門の立場から所内隈なく参観させてもらつたが、まづ私の第一に識りたかつたのは、かやうな稀に見る変つた形式の宿舎を考へたのは誰だかといふことであつた。当日はあまり詳しいことは識るを得なかつ

¹¹ 前掲注5.

たが、後に文書で森本氏に調査を依頼し詳しく設計者等を明らかにすることができた。」¹²

岸田はこのように、建築学者として当然のことながら、設計者に最大の関心を寄せて内原訓練所に赴いたのだが、その場では詳しい回答を得られなかったという。加藤完治の長年の側近である江坂弥太郎が同伴していながらこの質問に即答できなかつたというのも不思議ではある。そして、岸田が後日に得た内容が以下である。

「この円に徹底した日輪兵舎の設計者は誰か。それは渡辺亀一郎といふ人である。渡辺氏は山形県東置賜郡の人、国元の高等小学校を卒業後土地の自治講習所に入り傍ら自家農業に従ひ、後郷里を出て千葉県印旛沼地方に移住民を引率し来つて開墾に従事し、昭和十一年秋日本国民高等学校の職員となり、同年冬満洲国饒河大和村に少年隊と共に赴き、この時古賀直人氏の指導の下に兵舎建築の實際を研究し、日輪兵舎を考へ、十二年十月内原の訓練所に入り、一万人収容のための宿舎として試験的に日輪兵舎を八棟建設、十一月末本形式の宿舎採用と決定して、まづ山形香川二班300名にて建築に着手したが、本年三月業半ばにして脳溢血にて長逝され、時に齢四十二歳なりしよし、氏の建築に於ける独創に対し満腔の敬意を表すと共に氏のご冥福を心から祈り申し上げる。」¹³

この時点で、日輪兵舎の誕生に際しての渡辺の役割が、岸田にとって「設計者」として認識されたことがわかる。古賀の名前は出てくるものの（名前が間違っているのはさておき）、古賀が渡辺に建築を指導しただけの人物として位置づけられ、「日輪兵舎を考へ」たのは渡辺としか読み取れない文脈である。書き手が東京帝国大学教授という建築学の権威であることと、時期的に早いことから、後述するような渡辺亀一郎＝設計者といういくつかの文献のルーツは、この紹介記事である可能性も高い。

吉野工業学校の岸田林太郎は、1938年の『建築世界』誌に「創案者は最近

¹² 岸田日出刀「日輪兵舎」、国際建築、14、1938、297-304頁。

¹³ 前掲注11。

急逝された訓練所員渡辺亀市^[ママ]郎氏」, 「創案者渡辺氏は相当期する所があつて、この建築に当たられた由であるが過度の奮闘が禍してか急逝された事は残念である。此処に此の稿を捧げて同氏の奮闘に敬意を表することとしよう。」¹⁴と書いている。なお岸田林太郎も、1938年夏に内原訓練所を参観しており、檀原神宮外苑の拡張工事に全国から集まる勤労奉仕隊の宿泊施設として、日輪兵舎とそれを若干改良した建物を建てることに尽力した人物である。

このほか、『新建築』誌に1940年に掲載された内原訓練所の記事は、タイトルに「義勇軍訓練所営繕課 渡辺亀一郎」と入っており、岸田日出刀の1938年の記事を紹介したうえで、「この特異な建築（著者注：日輪兵舎）は今は亡き故渡辺亀一郎氏の苦心のものである」¹⁵と述べている。

ここで共通して強調されているのは、渡辺の創案上のイニシアティヴと犠牲的奮闘である。たしかに渡辺は、実際に窓や出入口に改良を加えた¹⁶とされるが、前述のように、渡辺を日輪兵舎の主たる設計者とし、古賀には触れないか全く後退させたこれらの記述には、時期的・キャリア的に考えて、かなり無理があるといわざるを得ない。

IV おわりに

このような記述に対して、古賀はどのように感じていたのだろうか。それを確かめる術はない。しかしながら、自らの書いた文章の中で日輪兵舎に触れるとき、古賀は必ず日輪兵舎の「創案者」であることを示す何がしかの文言を入れている。遺族の家には「日輪兵舎創案者古賀弘人」という書が残されている¹⁷。また、1943年に公表された古賀の文章¹⁸では、「不肖筆者が考案し」た内原訓練所の日輪兵舎建設に際しての渡辺の貢献をたたえているが、渡辺があく

¹⁴ 岸田林太郎「日輪舎を主題として」、建築世界、32(9)、1938、43-50頁。

¹⁵ 「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所-内原- 義勇軍訓練所営繕課 渡辺亀一郎」、新建築、16、1940、226-229頁。

¹⁶ 前掲注4。

¹⁷ 前掲注4、5。

¹⁸ ①古賀弘人「日輪兵舎の構造と意義」、民藝、5(5)、1943、2-11頁。②古賀弘人「防空と日輪兵舎-建設隊の提唱-」、東亜連盟、5(1)、1943、50-59頁。なお、渡辺の名前は「三郎」と誤記されている。

まで建築の素人であったということが重ねて記され、そのうえでの努力を評価するという形をとっている。

戦後、日輪兵舎は戦前の思想の体現とみなされ、社会からは忘れられていった。しかし、しばらくすると満州開拓の経験者が次第に体験を発信するようになり、1966年の『満州開拓史』¹⁹をはじめとする大部の満州開拓の記録も編纂されるようになった。さらに、上 笙一郎や櫻本富男²⁰らに代表される、満蒙開拓青少年義勇軍に関する一般書籍も1970年代以降にあらわれ、そこには戦前の資料に基づき日輪兵舎と創案者古賀弘人の名もあがっている。

にもかかわらず、建築の分野では古賀弘人は等閑視され続けた。建築史の藤森照信は1987年に「日輪舎を考え出したのは、／渡辺亀市郎^[ママ]／という開拓関係の人物だった。そして、彼は、日輪舎の建設が終わるや否や、あるいは建設中に、急逝してしまったらしい。今のところ、これ以上のことはわからない。」²¹（／は改行）と記しており、創案者に関しては建築以外の文献を（戦後のものも含めて）参照していないことがあきらかである。こうした状態が、岸田日出刀以降、少なくとも50年近く続いたわけである。

加えて興味深いのは、日輪兵舎の創案者については「正確」な満蒙開拓青少年義勇軍関係の諸文献においても、そこには本論文でとりあげたような建築関係の文献は全くといっていいほど引用されていないことである。

日輪兵舎は、満蒙開拓青少年義勇軍という制度の産物であり、同時に強烈な個性をもった新奇な建築であった。双方の分野に触れなければその存在の本質を描けないはずだが、長い間それはなされなかった。ある意味でここに日輪兵舎という存在への関心のありようが象徴的にあらわれているように思われる。すなわち、興味を持つ層が分野ごとに分断されており、参照文献を各分野内で完結させた結果、同じものに対して異なる物語をつむぐ状態が何十年も続いたということであろう。

¹⁹ 満洲開拓史刊行会編『満洲開拓史』、1966、907頁。

²⁰ ①上 笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』、中央公論社、1973、201頁、②櫻本富男『満蒙開拓青少年義勇軍』、青木書店、1987、289頁。

²¹ 藤森照信「戦時のドン底で拓いたカラカサの家 日輪舎」、新建築 住宅特集、10、1987、109-115頁。藤盛昭信『昭和住宅物語“初期モダニズムからポストモダンまで23の住まいと建築家”』新建築社、1990、439頁。に「満蒙に開いたカラカサの家－満蒙開拓青少年義勇軍と日輪舎－」と改題して所収。